幼児の協力性を育てるもの

——日々の保育にふれて——

西野紀代子

事例　砂遊びにおける、衝突・障害の対処

（—年中組MとYを中心に—）

場所　幼稚園砂場

〈砂山作りを目標に、並行的な協力の形で遊びが始まる〉

Y「サッキ、ドウイウフウニツクッタノ？」

T「カタァクツクッテ。トンネルヤマ、ダンダンカタマッテクルゾ。チョット、Hチャンノトコ、カタメテオイテ」

Mは、Hの傍のしゃもじを使おうとする。しかし、Hは貸さないように反対側へ置く。

M「Tチャン、シャモジカシテクレナインダヨ」と訴える。

〈行動と行動の衝突〉

T「ドコニアルノ？　オーイ、ドコニアルンダ？」

しゃもじの行方を尋ねる子どもたちの間から返事がない。だまって山つくりが続けられる。

〈Mの怒り・疎外感〉

皆が、しゃもじについて自分に返事をしないということから、

M「ジャ、ミンナイジワルスルコトニナッチャウジャナイカ。Tチャン、モウヤァダヨ」

仲間から外れる。しゃもじを借りられなかったことが、意地悪された、という拡張解釈に転化。

H「Mチャン、ウソツイタンダモン。（Hが意地悪はしていないのに、意地悪といった）センセイヨンデコヨウ」

M「（まわりに保育者はいない。Hはいってみるだけで動かない）オレ、（先生がきても—）シラナイッテイウヨ。シーラ

ナイ。ヤマコワシチャオウカ！」

Y「イクラデモ！マタスナバダカラ、ツクリナオスヨナ」と傍の子どもへ話す。

M「カタァクシタッテ、コワシチャウンダカラ」

Y「イイヨ、イイヨ。マァダコワサナクテモ」

といいながらつくり続ける。

〈Mの破壊行動〉

M「ヤルマエニコワシテヤレ！」

子どもたちでつくっている山を踏みつぶしてしまう。

M「イイダロウ。イイキブンダナァ」

Y「Mクンナンカ、コラセナイヨウニカギカケヨウカ」

すぐ山のつくりなおしが始まる。

M「ヤメルカラナ、バイバイ」

Y「ヤメテモイイヨ。Yチャンタチ、ツクッテルンダカラ」

M、立ち去る。約五〇センチメートルの高さの砂山ができて、四方からトンネルが通ずる。

〈砂山にトンネル開通・協力の成功〉

Y「アッ、ツヅイタ、ツヅイタ！」

K「ツナゴウ、ツナゴウ。ミエルカ？」

K「ミエル、ミエル。」双方穴からのぞく。

Y「ヤットツヅイタ。オイ、Kチャンモツヅイタヨ、Tチャン。Hチャンガ Yチャン（自称）ノホウニツヅカシテ」

H「イイヨ」といって立ちあがった途端、よろけて山の一部を踏みつぶす。

H「セッカクノコワシチャッタ。コワレチャッタンダヨ。マタヤロウヨ」

K「コワシタノ？　ダレガ？」

T「シラナイ。ドンドンヤルノ。ドンドンヤルノ」

次々と砂を盛りあげ、叩きながら、

H「Mチャンナンカ、イイモンナ」

と同じ言葉を三度繰り返す。H、山のふもとに、長い溝を掘り始める。

〈遊びの変化・発展〉

山つくりから、トンネル、さらに溝掘りが始まる。Yがこれに気づく。

Y「（溝を掘っているHへ向かって）ココ（Hの掘った溝のこと）ドウロニショウカ。Hクンハ、ドウロツクリニナンナヨ。ズーットツヅカシテ。タノムヨ。（Tに向かって）オイ、モットタカクシショウゼ、イルカイ？　スナ。ソシテ、ココニモイケツクロウヨ。カワ、カワ」

T「カワナンカイラナイヨ」

Y「ネェ、オオアナホロウカ？」

T「バァ（カ）。マダ、モットタカクシナクチャ」
Y「ウン、モットタカクショウゼ」

―以下略―

協力性という言葉の促えかたが、いろいろあると思いますが、ここではこのように現場でどこにでも見られるような、一般的な事例をもとに、個人的な面からMとYに焦点を当てて、問題を探ってみたいと思います。

Mについて

この記録を見ると、Mは初めにしゃもじを貸して、といわずに要求を潜在させたまま、直接行動でしゃもじをとろうとしたようです。それについて、他の子どもたちは、貸してといえば貸してあげるし、という無言のルールがあり、そのため要求を言葉で表現することを、Mに対して、主張しているわけです。

しかしMにはそのルールが正当に理解されません。従って友だちに対しては、一方的に感情的になるだけで交流が生まれません。Mがあくまでしゃもじを借りられなかった怒りは固執しても（事例には書きませんでしたが）、後でYは軽く、「キニスルナヨ。ソンナコト」と、発言します。Mは、「キニシテルヨ。オレカンカンニオコッテンダカラナ」と、答えています。

次に反対に、このグループの中で安定した子どもらしい活動を展開するYについて、協力性の面からその行動を部分的に追ってみようと思います。

Yについて

――気持の安定――

たとえば、Mに「ヤマコワシチャオウカ」といわれた時、「スナバダカラ、ツクリナオスヨナ」とか、「ヤメルカラナ」と、仲間から外れることを宣伝されても、「イイヨ」と自分たちが目下つくっている、という事実で発展的に答えられる。

Mに対する応答をみても、余裕があり、M「ヤメルカラナ」Y「ヤメテモイイヨ」というふうに、相手の感情をまずいちど受け入れるのである。Mに二度目に山をこわす、といわれたときも、「イイヨ、イイヨ、マダコワサナクテモ……」と答えているが、これには既にユーモアすら感じさせられる。

――感情的でないということ――

遊んでいて、自分の意見が受けいれられなくても、気持を崩さず相手の意見に同調できる。たとえば、Y自身が山の下に池から川をつくりたくなっていいだすと、Tに「カワナンカイラナイヨ」と拒否される。すると、次の方法として、再びTに「オオアナホロウカ？」ともちかけ、それを拒否されても次の段階で直ぐ、「ウン、モットタカクショウゼ」とTの気持に協調する。見ていても

興奮しないのである。Mの「オレ、カンカンニオコッテンダカラナ」という態度とは、対照的なものが窺える。

――周囲へ話しかける言葉が多い・遊びの変化・発展――

事例トンネル開通の場合を見よう。穴が続くと、ある子どもは続いたことは単純に感激するが、Yの場合、その喜びをすぐ横につなげる。「ツナゴウ、ツナゴウ、ミエルカ？」と頭を砂にすりつけるようにして穴をのぞきこむ。「オイ、Kチャンモツヅイタヨ」、とその喜びを友だちに知らせあう姿勢が生まれる。さらに「Hチャンガ、Y（自称）チャンノホウニツヅカシテ！」と遊びを発展させ、友だちの遊びの変化にも、いち早く気づいて、「Hクン、ドウロツクリニナンナヨ。ズーットツヅカシテ、タノムヨ」と言葉で働きかけて友だちの活動の意欲を刺激し、次の遊びへ変化・発展させるような、「ココニモイケツクロウヨ」とか「イルカイ？スナ」と必要な素材を一緒に運ぼうとする姿勢を見せたり、うっかりすると、おとなは、見落としがちではあるが、躍動的な動きで、遊びを盛りあげていく中心的な存在になっている。意欲的で他の子どもに比べてまわりの仲間への話しかけが多い。

――友だちと交渉をもつ――

事例の初めにあるように、砂山が崩れたあと、「ドウイウフウニツクッタノ？」と方法を友だちに尋ねたり、Hが砂山のふもとに溝を掘り始めると、気づいて「ココドウロニショウカ？」と積極的に話しかけて交渉をもとうとしたりする。まわりのどの子どもに対しても、高圧的な態度がみられず、誰にも同じような態度で接していくのである。

以上Yの行動を、多少まとめてみると、情緒的に安定感があり、怒りっぽくない、ということ、言葉が豊かで、しばしばまわりの子どもへ話しかけ、Yが自然に遊びの内容を、変化・発展させる要（かなめ）のような存在になっています。そこから、友だちへの交渉が生まれていきます。

全体から見た場合、この年中組の男児五名からなる砂遊びは、こわされたり、つくられたりしながら、五五分間続いています。途中で外れた子どもを除いては、みなたっぷり遊んでいます。できた砂山を途中で何回崩されても、この子どもたちの気持が、乱されたり、先鋭化しなかったところに、協力して遊ぶ楽しさを育てる一面のヒントが、あるように思います。この子どもたちにとっては、新しく山をつくりだす楽しさ、おもしろさの方が、できあがった山を壊されるつまらなさより、大きかったわけです。

協力性という問題が、人間にとって外側から与えられるものではないだけに、子どもたちの、自然な遊びの中にあって身についた、望ましい態度を、発見したり、再認識したりして、経験の幅がひろがり、また深められていくことを期待していきたいと思います。

（浦和母の会幼稚園）